

後付けの選択

麦谷眞里

(まえがき)Asi Wind の"CATCH #23"という手品をご存じですか？単売品でしたが、2018年に出た彼の作品集"repertoire"に収録されました。したがって、もうどこのディーラーにも売っています。単売品は、封筒の中に、解説の DVD とギミックが入っています(写真910)。

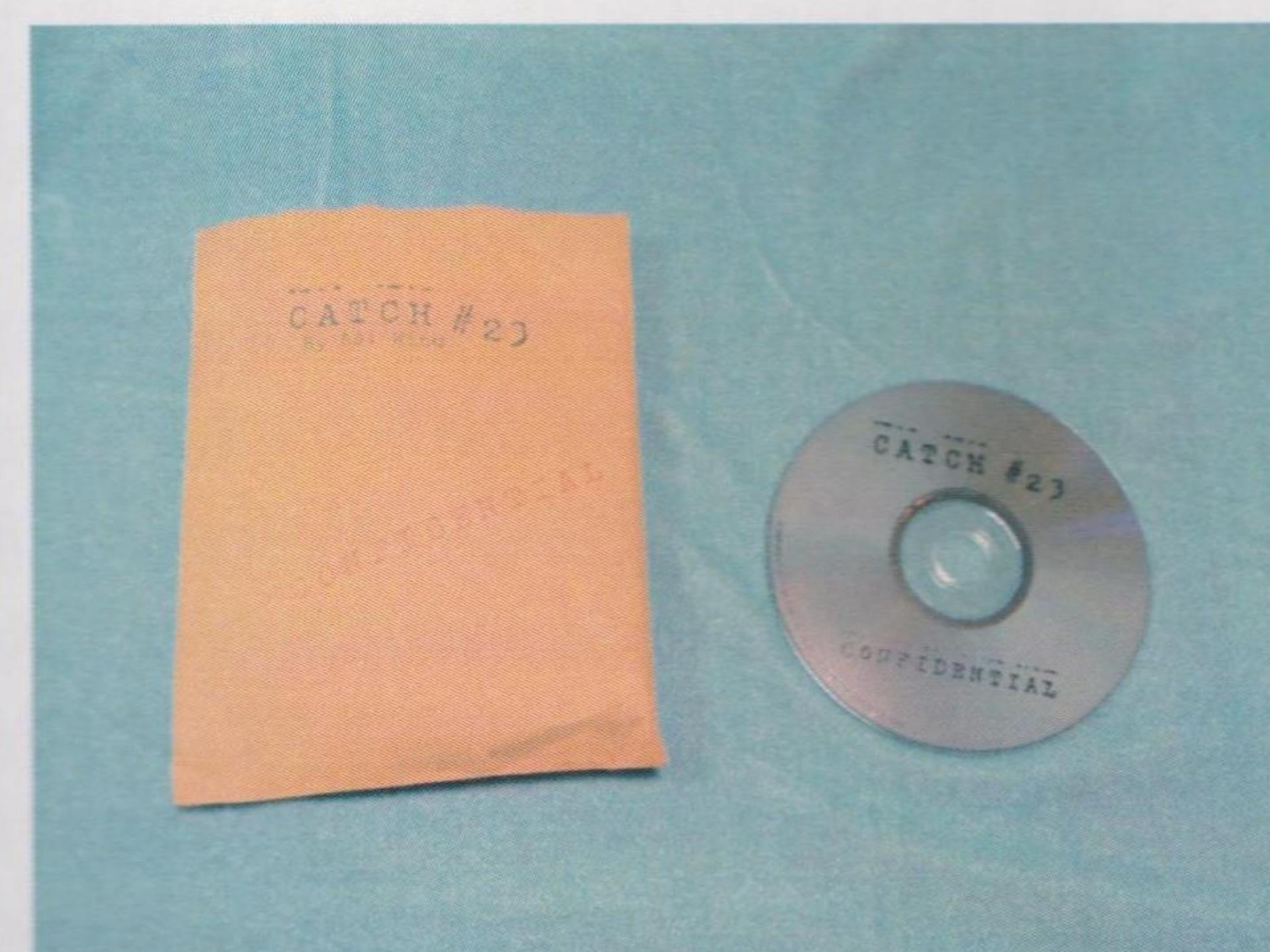


写真910

商品名の"CATCH#23"というのは、日本人には馴染みのない表現だと思いますが、英語に"catch22"という表現があって、それをもじったものです。意味は、「にっちもさっちも行かない

状態」を意味します。「ジレンマ」とか「板挟み」という意味でも使われます。1961年に Joseph Heller という人が書いた同名の小説が出典です。「軍律22条」に「狂ったものは軍から除隊できるという規則があるが、自分で狂っていますというのは狂っていない証拠で22条は適用されない」ということで、これが、「にっちもさっちも行かない状態」ということになります。

Asi Wind の手品のほうに戻ります。Live 映像を観る限り、おそらく Magic Castle で撮った映像だと思われます。現象は1番から5番までの番号を表記された小さな封筒があって、観客席から4人の客に出てもらい、各自好きな番号を言って、その番号の封筒を受け取ります。映像では2番が残り、それを Asi Wind が自分のものにします。ここまで書くとおわかりだと思いますが、マジシャンの封筒だけに小切手が入っています。似たような手品を観たことのある人は、なんだそれだけ?と思ってしまいます。もちろんそれだけではありません。これは素晴らしい手品なのです。もう単売商品は売っていないので、創作の経緯とか詳細は、作品集"repertoire"を参照するしかありません。

この手品の演技(映像)だけを観た時点で、私はおや?と思いました。1番から5番までの封筒が用意してあるのですが、すべて「手書き」なのです。最初にその手書きで番号の書かれた5枚の封筒を見せて、その中から4人の観客にひとつずつ選ばせます。

その昔、となみしゅうぞう氏が、「奇術研究」か「奇術界報」に似たような手品を解説しておられました。5枚の封筒の1枚だけに本物の紙幣を入れ、残りの4枚には白い紙を入れます。よく混ぜてから、4人の客に自由に1枚ずつ封筒を選ばせ、残った最後の封筒をマジシャンが確保するという演出で、途中で封筒を交換することもできたと思います。となみ氏の方法は特に封筒に番号など記載せず、シャッフルしながら客に選ばせるものだったと思います。タネは、封筒の封をするときに、確かに週刊誌の上で行ない、本物の紙幣を入れた封筒は、糊で週刊誌に貼りつけてしまい、代わりに、週刊誌の間から白い紙の入った封筒を1枚加えるという単純なものでした。したがって、封筒は5枚とも白い紙が入っているので、どれを選ばれても、また途中で交換することも可能でした。最後の1枚をマジシャンが確保したあと、この封筒からどのようにして本物の紙幣を出したのか、具体的な方法を覚えていませんが、たぶん、マジシャンの上着の胸ポケットに、予め紙幣の入った同じ封筒を用意しておいて、5枚の選択から残った封筒を一旦上着の胸ポケットに入れて、ただちに紙幣の入った封筒と交換して、その封筒を斜めにして胸ポケットから突き出しておくやり方ではなかったかと思います。4人の客の封筒の中身がすべて白紙であることを確認してから、残ったマジシャンの封筒を開けると紙幣が入っているという具合です。

Asi Wind の場合は、もっと凝っていて、最初に見せた手書き数字の5枚の封筒は、5枚とも一度に、予め準備した番号の書いてない5枚の封筒と擦り替えます。擦り替えると言うと大袈裟ですが、単純に、一度上着のポケットに入れて、再び出してくるときに擦り替わっているのです。それから、4人の客にひとりずつ希望の番号を言わせ、その番号の封筒を渡して行きます。番号が「手書き」だったのは、何も書いてない封筒のほうに、ネイル・ライターで番号を書いて渡していくからです。マジシャンには小切手の入っている封筒がわかっていますから、それ以外の封筒に客の選んだ番号をネイル・ライターで書いて渡して行きます。最後に残った小切手入りの封筒には、

最後まで選ばれなかつた番号を書くのです。巧妙ですが、私が変に思ったように、どうして番号が「手書き」なのか訝しく思った観客はいたはずです。少なくとも、となみしゅうぞう氏のやり方では、5枚の封筒のうち、どの封筒を選ばれても良かったのです。しかし、Asi Wind はどうしてもネイル・ライターを使いたかったのです。先ほど述べたように、最後に残った封筒から出てくるのは紙幣ではなくて、小切手なのです。そして、その小切手に書いてある金額は、なんと、ステージに呼ばれた4人の観客が選んだ番号の順になっているのです。すなわち、客席から向かって左から、4番、3番、5番、1番、と各客が選んでいたら、小切手の金額は \$4,351 と書いてあるのです。この金額も、実は、後からネイル・ライターで書いたのです。それだけではありません。ステージに上げられた4人の観客の封筒の中には、それぞれの観客の特徴の書かれた紙(予め書かれたもの)が入っているのです。非常によく考えられた手品なのです。

これと似たような手品に "7 Keys to Baldpate" がありますが、いろんなバリエーションがあるにしても基本的にどの Key を選ばれても大丈夫なように構成されていますから、アプローチとしてはとなみしゅうぞう氏のものに近いです。"CATCH#23" は商品名もさることながら、素晴らしい現象や効果の割にはかなり難しい手品なのです。考えてみても、都合5回も、観客に気づかれないようにネイル・ライターで数字を書いて行く手順はマジシャンにとってもストレスであるには違いありません。特に小切手に金額を書く場面は、記入スペースも狭いし、なかなかたいへんです。

ただ、こういう現象は封筒や鍵の例を出すまでもなく、古くからあって、観客を4,5人巻き込むだけでなく、この手品一つでかなりの時間を消費するため、マジシャン側にとっては根強い需要があります。そこで、観客がどれを選んでも、マジシャンの手に残したいものが残る、いわば「後付けの選択」について考えてみます。

1. 5枚の封筒

[現象の概要]

封筒は小さいものを使います。マジシャンは、デックからハートの A から 5 までの 5 枚のカードを抜き出して、よくシャッフルします。観客の 1 人にシャッフルさせてもかいません。シャッフルしたら、4 人の客に一枚ずつ引いてもらいます。残ったカードはマジシャンのものとします。カードを配り終えた段階で、各客には自分のカードがわかりますので、そのカードとマジシャンのカードとを交換したい客がいたら交換します。

最終的に 4 人の客とマジシャンのカードが確定したところで、マジシャンは、予め用意してあった 5 枚の封筒を示します。封筒のそれぞれには、♥A～♥5 のシールが貼ってあります。マジシャンは、客が持っているカードと、シールで表現された当該の封筒とを交換します。

客が封筒を開けて行くと、白い紙が入っています。最後にマジシャンの封筒を開けると本物の一万円札が入っています。

[準備と秘密]

① ♥A～♥5 の各シールを貼った封筒を 5 枚一組(1 セット)として、これを全部で 5 セット 25 枚用意します(写真911)。



写真911

- ②この1セット5枚(合計25枚)の各セットそれぞれに順に「当たり」のカードを決めて、その中に一万円札を入れておきます。すなわち、第一セットは♥A、第二セットは♥2、第三セットは♥3、第四セットは♥4、第五セットは♥5です。シールはセット毎に色分けしてあります。そのほかの20枚の封筒には白い紙かもしくはグリコのおまけのような小さな玩具などを入れておきます。
- ③5セットのうち、ひとつ(仮に♥Aが当たりのセット)は、テーブルの上に置いて、シルクを上から掛けておきます。残りのセットは5枚ずつ、上着の左ポケット(♥2)、上着の左内ポケット(♥3)、上着の右ポケット(♥4)、上着の右内ポケット(♥5)とセットごとに分散して入れておきます。

[実際のやり方]

- ①[現象]のところで、「予め用意してあった5枚の封筒」という文言は手品の廣告風のレトリックで、実際には、「予め用意してあった5セット25枚の封筒のうちの1セット」です。
- ②デックをシャッフルし、♥A～♥5の5枚のカードを抜きだしてよく混ぜます。混ぜたら、4人の客に1枚ずつ選んでもらいます。これは、裏向きでも表向きでもかまいません。客が1枚ずつ選んだら、「残った1枚は私のカードとします」とマジシャンのカードを見せます。仮に♥2であったとします。ここで、「もし、自分のカードと私のカード(♥2)を交換したい人がいたら交換できます」と促します。交換した後、再度同じオファー(提案)をしてもかまいません。
- ③マジシャンを含む5人のカードが確定したら、「いいですね。それでは、もうカードは交換できませんよ」と言いながら、仮にマジシャンの手元に♥Aが残ったら、テーブルの上のシルクを除けて、シールの貼られた5枚の封筒を示します。これは、もっとも理想形です。
- ④「封筒が5枚あります。それぞれの封筒にカードのマークが付いていますから、その封筒とお持ちのカードとを交換します」。客のカードと当該の封筒とを交換します。マジシャンは♥Aの封筒を取ります。
- ⑤「それでは、順に、封筒の中を見て行きましょう」こう言って、客に一人ずつ持っている封筒の中身を点検させます。白い紙です。最後にマジシャンは、「私のは…」と言いながら封筒を開けると1万円札が入っています(写真912)。

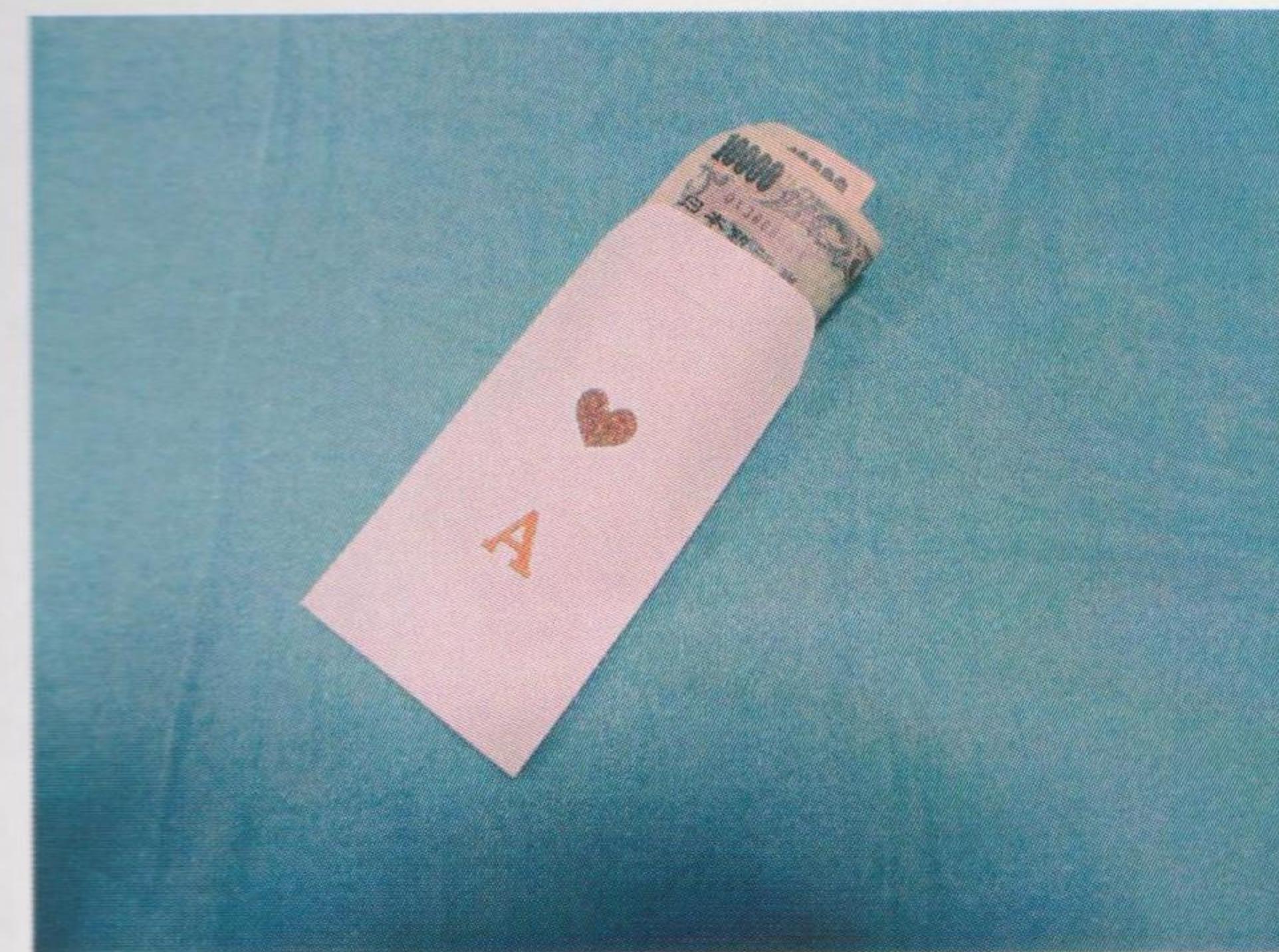


写真912

⑥上の場合分けは理想形です。仮にマジシャンの残されたカードが♥5だった場合は、テーブルのシルクには目もくれず、「ここに、予め用意してあった封筒が5枚あります」と言って左手を上着の右内ポケットに入れて、5枚の封筒を取り出して来ます。このセットでは、♥5の封筒に1万円札が入っています。客のカードと当該の封筒を交換して、それぞれ中身を点検し、マジシャンの♥5の封筒から1万円札を出します(写真913)。

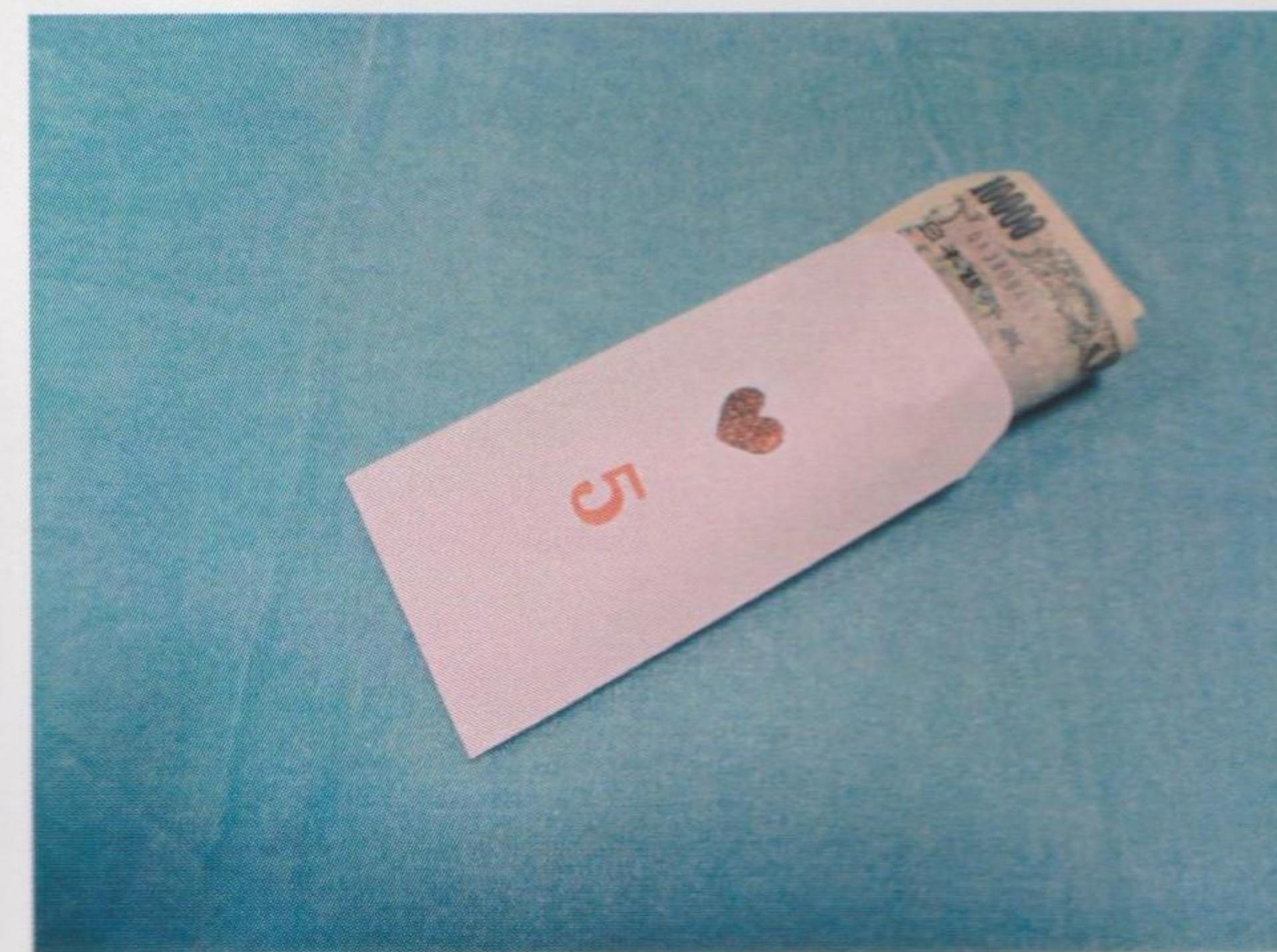


写真913

2. 5枚の封筒のバリエーション

客が何を選ぼうとも、後付けで強制的に選択する手品は、これ以外にもたくさんあります。上の5枚の封筒で、最初に♥A～♥5の5枚のカードを表向きにして観客に選ばせた場合、最後に残る確率が高いのは、♥2と♥4ですので、テーブルの上に置く1セットをどちらかにしておけば奇跡が起こります。

カードを表向きにしたまま特定のカードを観客に強制するのは難しいので、5枚とも裏向きにしてそれぞれ選んでもらうことにはすれば、特定の1枚を残す方法はあります。ただ、こんなところで変な技術は使いたくないので、せいぜい、マークト・カードを使って、裏向きのまま最後にマジシャンに残るカードがわかったところで5枚の封筒を出すようにするのが少しは不思議さが増すかも

しません。

3. 技術を使う

この種の手品にスライハンドを使うことはお勧めしませんが、技術を使えば、相当な部分が技術によって補われるため手順の流れは楽になります。

[必要なもの]

- ①♡A～♡5のシールを貼った封筒5枚。中には5枚とも白い紙を入れて封をしておきます。これは、テーブルの上に置いてハンカチーフをかけておくか、あるいは、マジシャンの上着の右ポケットにまとめて入れておきます。
- ②まったく同じ封筒で中に1万円札を入れて一旦封をしてペーパー・ナイフで開封したもの1枚。
- ③ペーパー・ナイフ1本

[準備]

準備した1万円札入りの封筒は、上着の左内ポケットの外側にクリップで挟んで置きます(写真914)。ペーパー・ナイフもこの内ポケットに入れて置きます(写真914)。

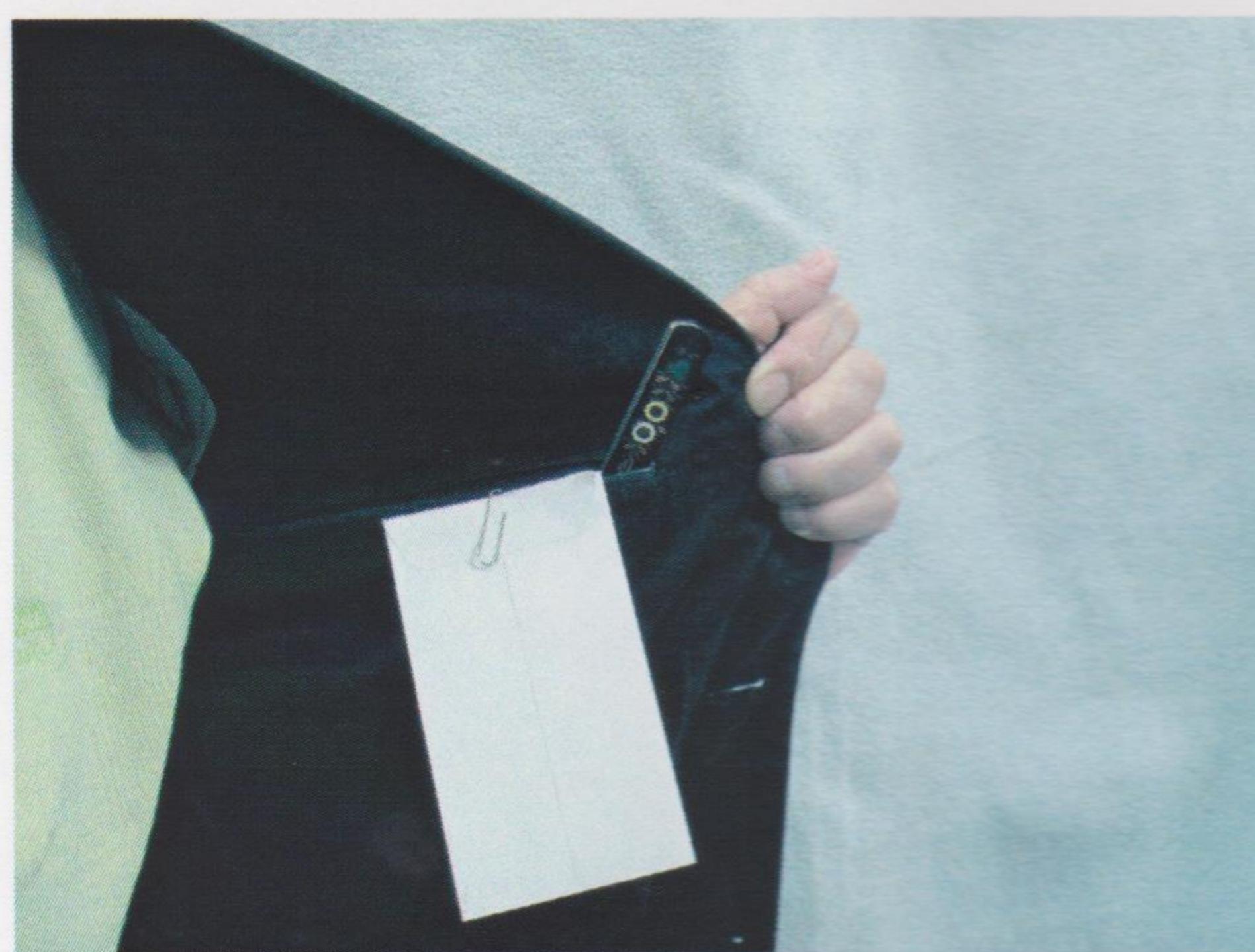


写真914

[やり方]

- ①デックをシャッフルして、中から♡A～♡5の5枚のカードを取り出します。4人の観客に、この5枚のカードのうち、好きな1枚を選んでもらいます。最後のカードはマジシャンが取ります。観客がマジシャンのカードと交換したいと言ったら交換します。
- ②観客が自分の選択に満足したら、5枚の封筒をテーブル上に出します。そして、それぞれのカードのシールにしたがって、封筒を配ります。ここで、マジシャンは、「すべて封がしてあります」と、開ける前にもう一度チャンスを与えましょう。私の封筒と交換したい人がいたら、この時点で交換ができます。ただし、これが最後です」と言います。交換したい人がいたら交換します。
- ③観客が4人とも満足したら、「では、ペーパー・ナイフをお渡ししますので、それぞれの封筒の封を開けてください」と言いながら、まず、マジシャンの封筒はテーブルの上に置きます。シ

ルの貼ってあるほうが下で、テーブルにくっついています。右手を上着の中に入れて、まず、クリップで挟まれた開封済みの封筒を天海パームし、ついで、親指と人差指とでペーパー・ナイフを摘まんで取り出します(写真915)。



写真915

④ただちに、このペーパー・ナイフを一旦左手に渡して、観客の1人に渡します。「開封したら、次々とペーパー・ナイフを貸してあげてください」と言いながら、左手でテーブル上のマジシャンの封筒を取り上げ、この上に、右手に天海パームしている封筒を重ねます。ただし、いま加えた封筒の上端をほんの少し、下にして重ねておきます(写真916)。

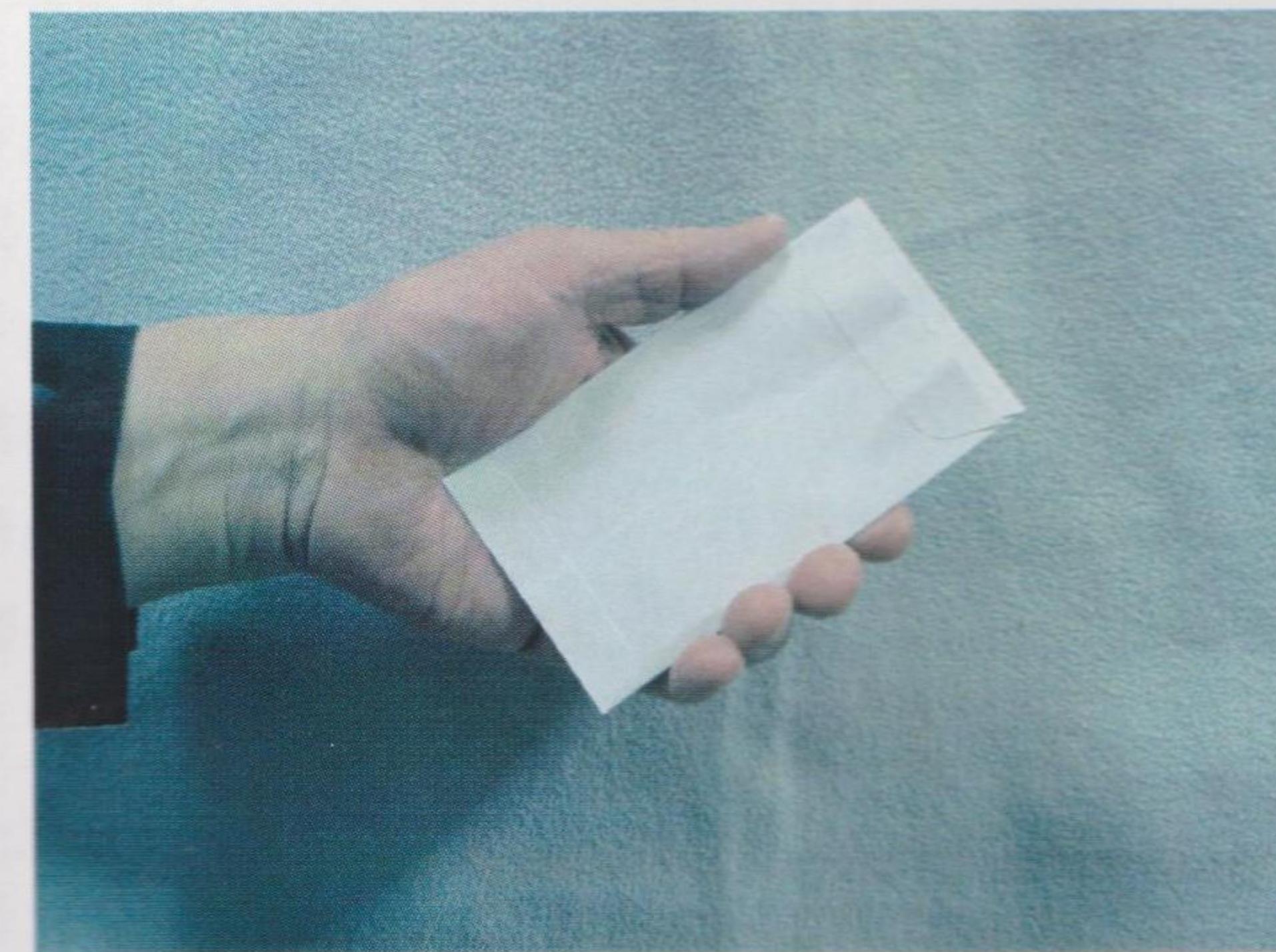


写真916

⑤観客がそれぞれ開封し終わって中身の白い紙を取り出したら、マジシャンもペーパー・ナイフを受け取って、下側の封筒を開封します(写真917)。このとき、下側の封筒のシール部分が指の間から観客にも見えるように気配りします。封筒は薄くて小さいので、2枚重ねて持っていても、2枚であることは容易にわかりません。また、実際にペーパー・ナイフで開けていますから、このときに封筒が2枚あると疑う客はいません。

⑥マジシャンが、左手の封筒を傾けると準備してあった封筒の中から1万円札が出て来ます。1万円札を取り出したら、左手の2枚の封筒は上着の左ポケットにしまいます。

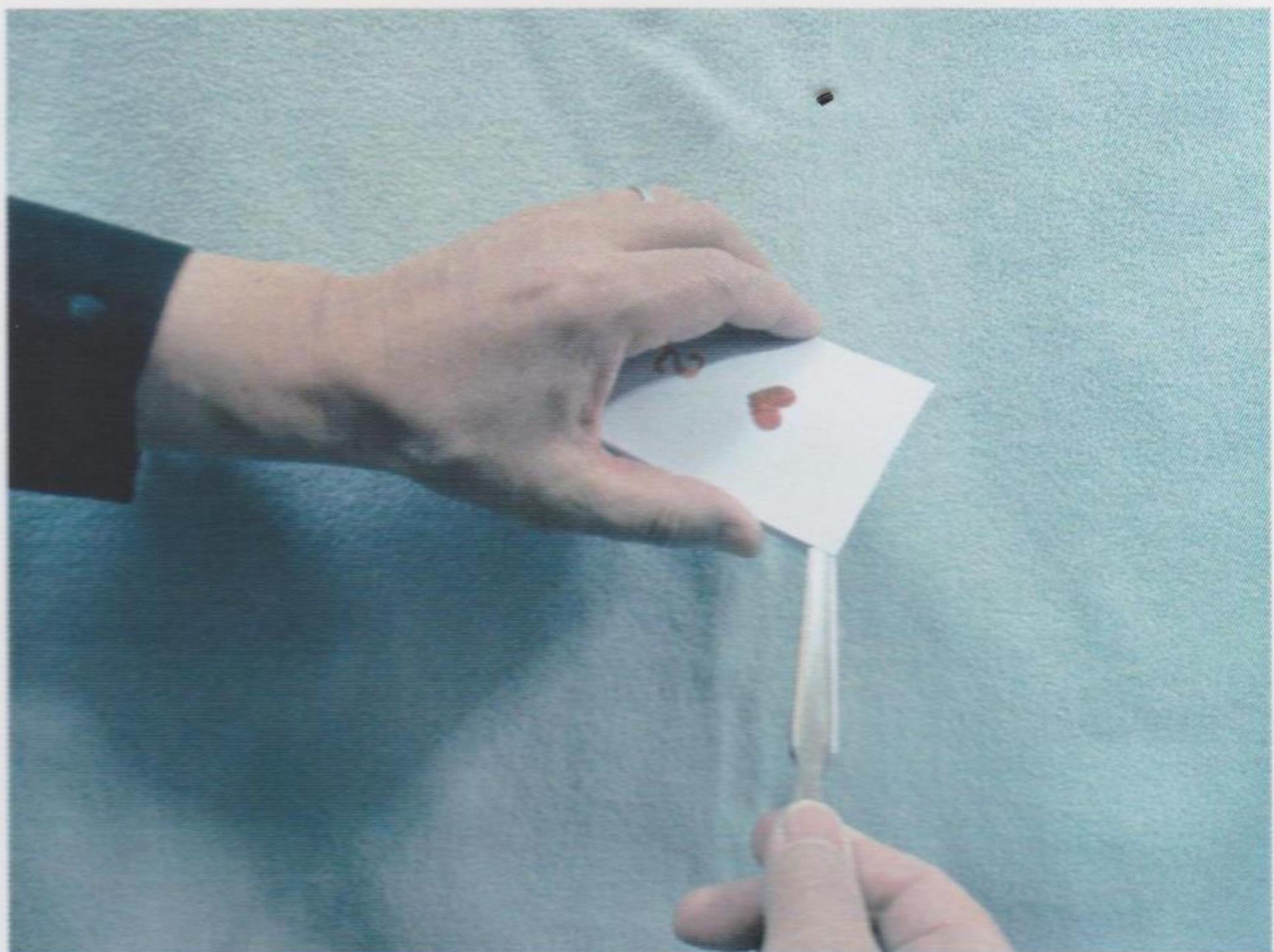


写真917

[コメント]

Asi Wind は、思いもつかないような発想で手品を考えますが、“CATCH#23”は、さすがにここまで捻る必要があるかな、と思いました。スムーズに演じるには相当な練習が必要です。

Stabbed Perplex

麦谷眞里

(はじめに)新沼研氏は、私はお会いしたこと実際に生の演技を観たこともありませんが、商品化された数々の作品を見る限り、傑出した能力の持ち主です。少なくとも、これまでのカード奇術の概念をはるかに超えた発想は、もし、いまでも石田天海賞が存続していたら、まず間違いなく受賞されたことと思います。前出の Asi Wind が、これまでの手品の既成概念を土台とした一定の枠の中で新しい手品を考案することに長けているとしたら、Michael Chatelain や Shin Lim や新沼研氏などの現代カード奇術の担い手たちは、既成概念に捉われない斬新なアプローチで、カード奇術に革命をもたらしたと言っても過言ではないでしょう。

その新沼研氏の“KARATE Q”を動画で観たとき、私は本当に驚きました。私のような古いタイプのマジシャンには、カード・マジックは、デックに何か加えるとしたら、せいぜいダブル・フェイスなどのギャフ・カードくらいで、仮に一部に細工するとしてもラフ加工やライジング・カードのメカニズムが限度です。新沼研氏の“KARATE Q”的ように、デック全体を破壊的に使おうという発想はまず生まれて来ません。この作品は、税込み4,563円でまだ商品として販売されていますので、これ以上、詳しいことは書きませんが、現象だけを書いておきますと、客の選んだカードだけをデックの中から指で突き刺して抜き出します。本当にデックのトップ・カードにマジシャンの指がめり込んで行くのは壮観です。さらに、指はなんとデックを貫通します。そして、客のカードだけを突き刺して抜き出すのです。ただし、デックは付いて来ません。デックを付けるとおそらく1万円以上の価格設定になるからでしょう。

さて、"KARATE Q"は素晴らしい作品ですが、実際にこれを自分が演じるとなると隘路がいくつもあります。その最大のものは、デックを事前にも事後にもシャッフルできないことです。また客にカードを選ばせるとき、客のカードをデックから抜き出せないばかりかリフル・フォースしか方法がないのです。そこで、なんとか、一定のシャッフルができる、かつ客のカードを抜き出してサインさせて同じように演じられないかと考えたのが以下の"Stabbed Perplex"です。言うまでもなく、"KARATE Q"がベストの秀作であることに疑いはなく、この手品を観たときの観客の衝撃を考えると、"Stabbed Perplex"は中途半端なカード・マジックに感じられるかもしれません、タイトルの"Perplex"がそれを如実に物語っています。

[現象] デックから客が任意に選んでサインしたカードを、マジシャンが見事にナイフで突き刺して抜き出します。

[必要なものと準備]

①デックの半分程度(25枚)のカードを1枚ずつ加工する必要があります。まず、カードの中央からやや右横にずれた位置に文房具用のパンチで穴を開けます。中央よりやややすれた位置にしたのは客の選んだカードを速く出すためです。穴の大きさは6mm程度にします。ナイフの切っ先が入らないので最低でも6mmは必要です(写真918)。



写真918

②次に、この穴から右方向の真横に、鋏で切り込みを入れます。これは、後からナイフの刃が通る「路」になります(写真919)。重なったカードの切り込みが前後にずれると滑らかにナイフが通らないので、ナイフを穴から真横にスムーズに通らせるためには、単に鋏を1回入れるだけでなく、2~3mm程度の「溝」を作ったほうがやりやすいので、鋏を2回入れて、2~3mm幅の「溝」を作つてやると、ナイフがその部分を通過することになります。この「路」は、ナイフが通りやすいだけでなく、客のカードを引き出しやすくなります。実際には、何回も練習しているうちにカードの縁が削れて、ナイフの刃が自然に通りやすくなります。また、この25枚のトップ・カードだけはややショート・カードにしておきます。



写真919

- ③パンチとカット加工した25枚のカードの下に、普通のカードを1枚加えて26枚にします。さらにこの26枚の上に、普通のカードを26枚載せてデックを完成させます。残った2枚のジョーカーを上半分と下半分にそれぞれ差しこんでおきます。この状態でカード・ケースに入れておきます。
- ④細身のナイフ1本。私の使っているナイフは、後述の写真を参照していただきたいのですが、実はカラー・チェンジング・ナイフの商品です。普通のカラー・チェンジング・ナイフよりやや長めの刀身です。ナイフは、上着の右ポケットに入れておきます。
- ⑤サインペン1本。

[やり方]

- ①カード・ケースからデックを出します。切れ目は右です。まず裏のまま軽く拡げ、次いで、デックを縦に回転させて、表も軽く拡げます。まったく普通のデックに見えます。もう一度縦に回転させて裏向きに戻します。上半分は普通のカードですので、この範囲でオーバー・ハンドシャッフルします。カード・ケースは、テーブルの脇に置いておきます。
- ②シャッフルしたら、デックを縦に回転させて表向きに拡げて、「ジョーカーは使いませんので除いておきます」と言いながら下半分と上半分に差しこんだジョーカーをそれぞれ抜きだして脇に除けます。下半分はナイフのための切れ込みが入っていますが、よほど大きく拡げなければ気づかれることはありません。デックを縦に回転させて裏向きに戻します。
- ③観客の1人に人差指を出してもらい、デックの上半分だけを拡げて、「どれでもいいですから1枚、触ってください」と言います。上半分は、普通のカードですから、どれを選ばれてもかまいません。稀に下のほうから選ぼうとする客がいますが、その場合は、「選ばれたカードにはサインしてもらいますから、どれでもいいのですよ」と付け加えて安心させ、上半分から選ばせます。
- ④客がカードを選んだら、カードの表に、用意したペンでサインしてもらいます。「これで、このカードは世界でたった1枚になりました」と言いながら、客のカードを右手で受け取って、左手のデックの下半分のやや上方(中央寄り)に差し込みます。
- ⑤デックを揃えて、上半分だけでシャッフルします。シャッフルし終えたら、手前の端をリフルして

ショート・カードを見つけ、そこでデックをカットします。これで、デックは、上半分がナイフのための切り込みを入れたカードで、その中に客のサインしたカードがあることになります。

⑥デックを裏向きでテーブルの上に置きますが、トップ・カードには穴と切れ込みがありますので、それは常に左手を動かしてカバーします。このときは、左手でデックをテーブルに置きつつ、右手を上着のポケットに入れてナイフを取り出します。取り出したら、一旦ナイフを左手に渡し、右手でナイフの刃を拡げ、「このナイフであなたのカードを見つけます」と言います。

⑦左手でテーブル上のデックを押さえ、ナイフの刃が右横方向に向くようにしてデックのトップ・カードの穴に差し込んで、突き刺します(写真920)。



写真920

⑦さらにナイフをデックの奥まで挿入して行きます。すると、上方にある、まったくカットしていない客のカードの手ごたえがありますから、その部分から下へ、もう少しだけナイフを刺し下します(写真921)。



写真921

⑧右手のナイフで客のカードを貫き通した手応えを感じたら、左手でデックをしっかりと押さえ、そのまま右手のナイフを客のカードと一緒に右横にスライドさせます。ナイフと客のカードがスムーズにデック内を通過できるように左手の力加減で助けます(写真922)。

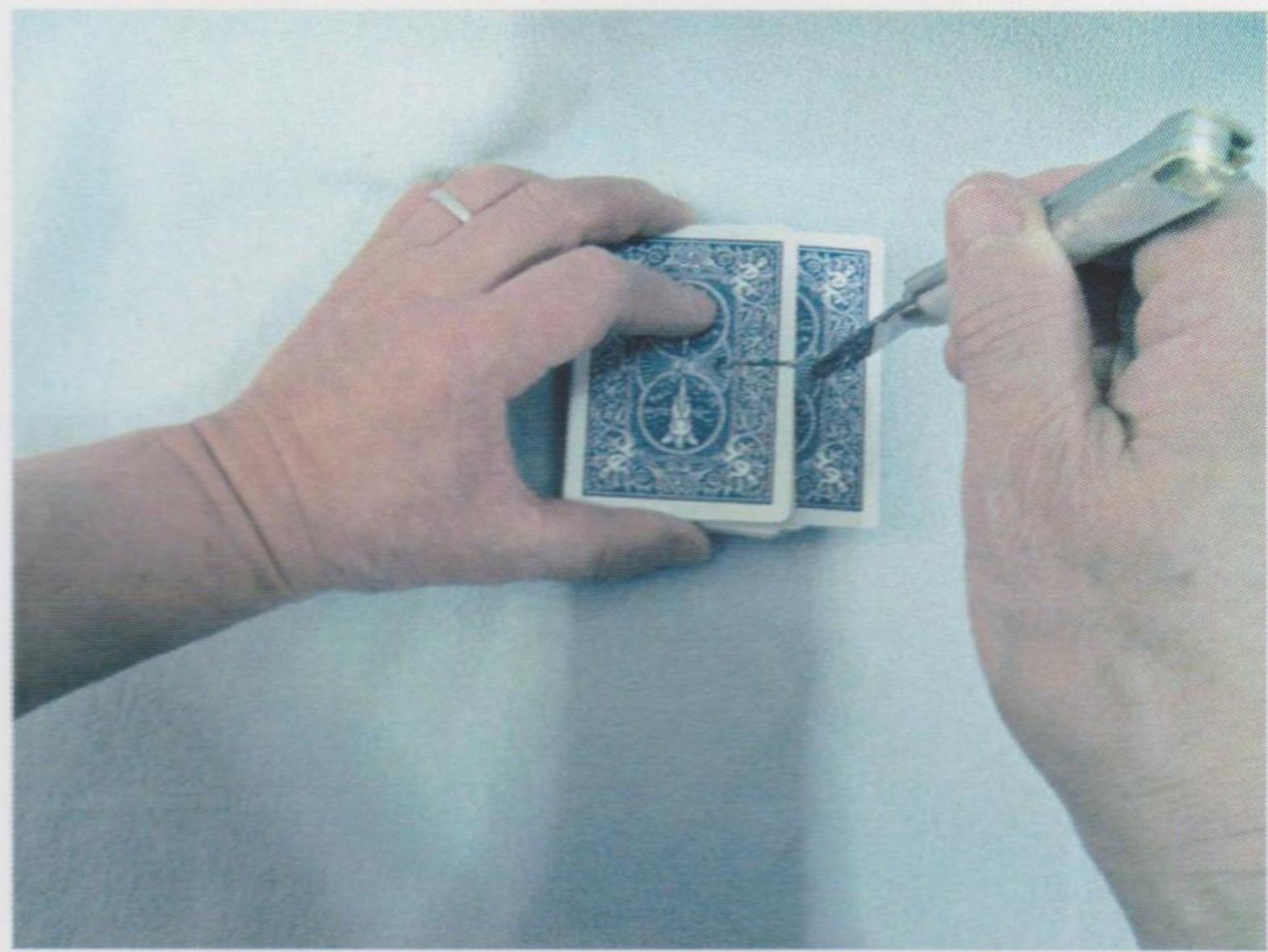


写真922

⑨ナイフが先にデックをクリアします。続いて、そのまま右側にナイフをスライドし続けると、ナイフに刺さった客のカードがクリアします(写真923)。

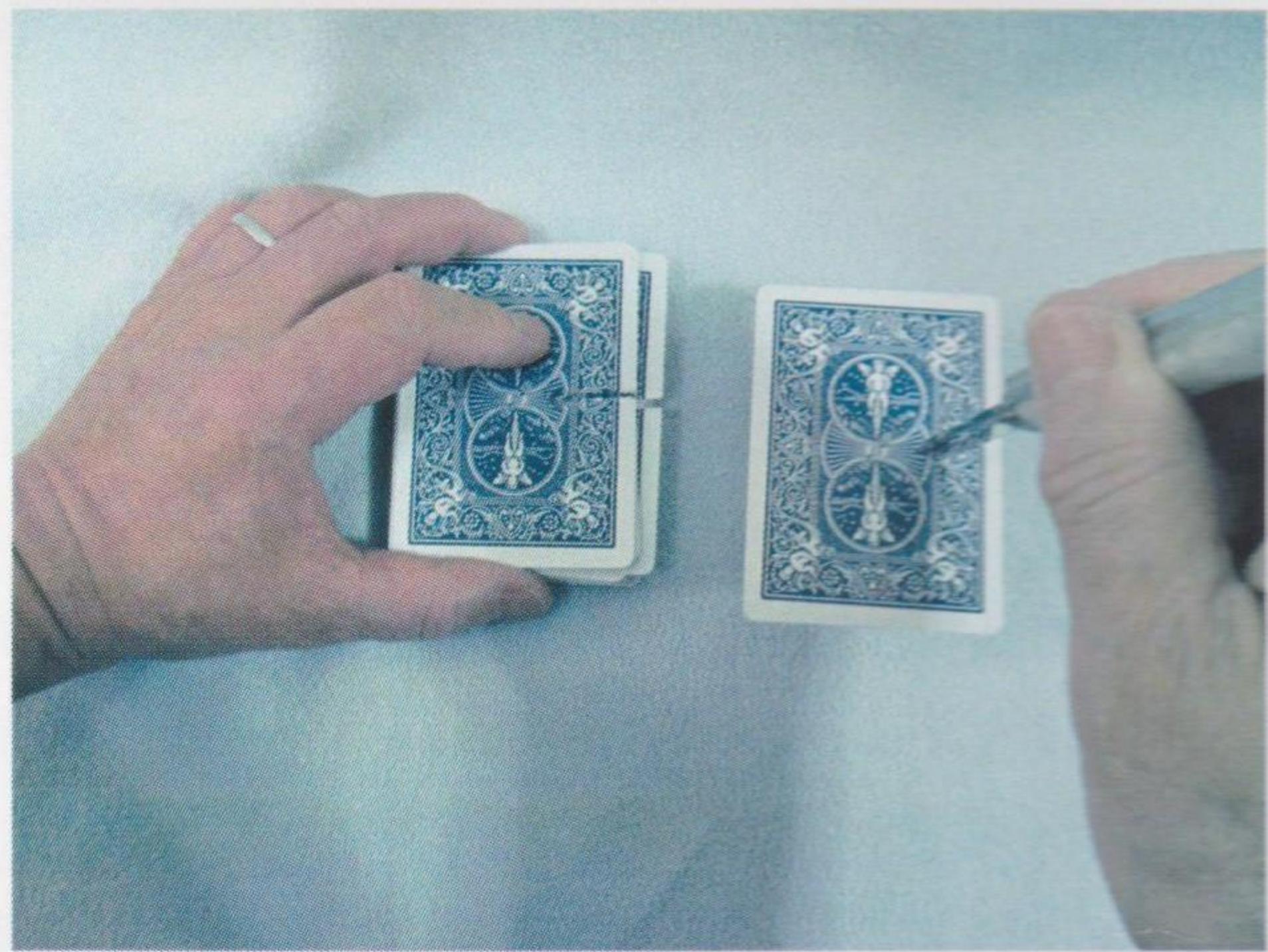


写真923

⑩客にカードの名前を訊きます。ナイフに刺さっているのはまさしく客のカードです(写真924)。



写真924

⑪左手のデックを脇に置いて、左手でナイフから客のカードを抜いて、サインした客に、確かに自分のサインであることを確かめてもらいます。

⑫客にカードを渡したら、客が自分のサインを点検している間に、テーブルの上からカード・ケースを取り上げて、デックをケースにしまいます。

[コメント]

"KARATE Q"のギミックは実は消耗品です。指を本当にデックに貫通させるので、そのための消耗品が必要で、商品を購入すると10回分付いて来ます。つまり、練習も含めて10回使用すると、それ以上行なうにはRefillの追加購入が必要です。通常、この種の商品には、この消耗品だけを、たとえば50回分ずつ別売りにしたりするのですが、この商品は、購入すると解説書とこのギミックが10回分入っているだけなので、簡単に言うと、始めからRefillだけを売っているのです。したがって、ビジネス・モデルとしては、最初にデックも付けて、もっと高い価格設定にしておいて、あとから消耗品のRefillだけを追加で販売したほうがいいと思うのですが、それは私が勝手に思うことで、新沼氏には、まったく別の考えがあるのかもしれません。しかも、現時点では、この商品そのものが販売終了となってしまっています。このあと販売されるかどうかは未定です。

いずれにしても、この作品は10回演じたら終わりです。私自身は赤裏と青裏の両方を購入しましたので、とりあえず練習も含めて20回は演じてみることができます。かつて、アメリカでテーブル・ホッピングのアルバイトをしていた私としては、10回や20回ではあっという間に尽きてしまいます。今回"Stabbed Perplex"を提案したのはそのためです。これなら、客の選んだカード分と穴が裂けたデックのトップ・カードだけを補充するだけで何回も演じることができます。

これに使用したナイフは、すでに述べましたが、カラー・チェンジング・ナイフの両面同色の仕掛けのない方を使っています。市場に流通しているカラー・チェンジング・ナイフにはいろんな長さ、いろんな幅、いろんな材質・色のものがありますので、かなり選択の幅は広いです(写真925)。



写真925

今回、使用したものは、写真925の中央のもので、折り畳んだ状態の長さは約10cmですが、刀身の長さは約8cm、切っ先の幅は約3~5mm、刃の幅は最大部分で約10mmのナイフです。

これは、カラー・チェンジング・ナイフのうち、客に改めさせる方の1本ですから両面同色です。すでにデックの横側は切れていますので、客のカードを刺すために切先は必要ですが、刃そのものの鋭利さはそれほど必要ではありません。実際にいろいろ試してみると、Victorinox のスイス・アーミー・ナイフでも十分に用を足すことはできます。

そもそも、これまでのカード・スタッブの手品は、マリーニの目隠しで行なう作品が有名で、もちろん私はマリーニ本人の演技を観たことはありませんが、ボブ・シートがこれをかなり上手に演じるので、手品の良さとしては十分に理解しています。そのほかにも、クロース・アップで演じるものや、ステージで空中にデックを投げ上げるもの、マイク・ケイヴニイのように、ナイフではなくて、矢で射るものなど、枚挙に暇がないくらいバリエーションがあります。ディーラーのサイトで“Stab”と検索しただけでもすぐに10くらいの商品がヒットします。最近では、ナイフや矢などではなくて、なんとiPhoneのヘッド・セットのコードで客のカードをスタッブする“Sonic Stab”などという時代を反映した作品・商品などもあります。

「カード・スタビング」の歴史は、18世紀まで遡りますし、aficionado まるまる一冊を費やしても足りないくらいですので、いまここで述べることはしませんが、初期の段階では、テーブルや床に蒔いたカードを剣で刺していたようです。マックス・マリーニのカード・スタブはあまりにも有名ですから、ご存じの通り、これもテーブルの上にカードをスプレッドします。その後、時代が移るにつれてカードを空中に投げ上げるやり方が多くなりました。最近の商品は、3人の観客の選んだ3枚のカードを剣で刺す“Card Sword”も含めてカードを空中に投げ上げるのが主流です。しかも、デックを上手にバラバラに空中に投げ上げるのも容易ではありませんから、近年では、カードを電気的に噴水のように投げ上げてくれる“Card Fountain”なる小道具まで商品化されています。

しかしながら、“KARATE Q”は、カードをテーブルに拡げて蒔くことも空中に投げ上げることもしないのです。空手コインからヒントを得たと解説書には書いてありますが、デックにそのまま指を入れてカード・スタビングを行なおうというのは非凡な発想です。空手コインにヒントを得ると、普通なら、客のカードをデックに戻してからデックを空中に投げ上げ、それを人差指で貫いて当てるという流れになると思います。あるいは、そのような作品を考えているうちに、人差指をズブリとデックに入れるという形になったのかとも思われます。新沼研氏は、とにかく実際のものを手に取ってあれこれやってみることが大事だと仰っていますので、その可能性はあります。ちなみに、私は、氏の“THE SCRATCH”も大好きなカード・トリックのひとつで、よく演じます。最近はあまり活動されていないようで、そういうえば、もう手品は引退します、という趣旨の手紙を受け取ったような気もします。大阪の森下宗彦さんもそうでしたが、突然手品を辞める人というのはときどきおられて、それも一種の手品のような印象です。

これは、aficionado の Vol.6-No.2 です。

郵便の送付先: 〒145-0061 東京都大田区石川町2-33-1-904 マスカレイド

Eメール・アドレス: masqpart4@aol.com

これは、限定100部のうちの08／100です。

(2022年1月)